

個人

海と共に、気仙沼で生きてきたことは誇り。

気仙沼市

菊地 ひろ子 個人

取材日 2012.08.08

宮城県地球温暖化防止活動推進員。宮城県環境教育リーダー・環境省登録環境カウンセラー(市民部門)。青空エコカフェ代表。公益財団法人みやぎ・環境とくらし・ネットワーク評議員。気仙沼市在住。震災後は仮設住宅の冬期間の防寒対策の学習会や、「家庭でできる節電」をテーマに環境学習の実施などの活動を行なっている。

3月11日 14時46分

自宅にいた。気仙沼市役所の環境課へ行く準備をしていた時に、大きな揺れを感じた。自宅は築40年近いため倒壊してしまうと思った。外に出たら電柱が倒れてくるかもしれない。近くにあった座布団で頭を覆い、台所のテーブルの下に潜った。棚が開き、食器類が次から次へと落下してきた。6人掛けの大きなテーブルだったため、直接身体に当たることはなく、自分の身を守ることができたが、とにかく恐怖心が募るばかりだった。テーブルに必死につかまりながら、揺れが収まるのを待った。

今回の震災では、経験したことのない音を聞いた。家が壊れるような音だった。普通の地震とは明らかに違う音だったので、家がつぶれてしまうと思った。

大きな揺れがある程度収まった後は、外に出て家の周りの状況確認、近所の知り合いの1人暮らしのお年寄りの安否確認に向かった。日頃から、何かあった時はその方の様子を見に行く事が習慣だった。

夫にメールをしたが案の定携帯電話は繋がらない。夫は、内湾のタンクが多く建っている所で働いていたし、多くの親類も海岸周辺に住んでいた。常日頃から大きな地震が起きた場合は、山へ逃げることを心がけていた。連絡はつかなかったが、みんな山へと逃げているだろうと思った。

津波が来る、と揺れの後すぐに意識した。1960年のチリ津波地震を経験している。当時中学1年生だったが、実家が海の目の前で、自宅が床上浸水したことを鮮明に覚えていた。2年前に起きたチリ津波でも気仙沼では内湾が浸水した。これらの経験が、今回はあれだけの大きな規模の地震だったので、即座に津波が来ると直感させた。防災無線で30分後に大津波が来るとの一報が辺りに鳴り響いた。



津波の被害を目の当たりにして

震災翌日、近所の人々が歩いて市内の状況を見に行った話を聞き、今回の災害の凄まじさを改めて感じた。「商店が無くなった」「病院が流れて無くなっている」自分で確かめるべく、市内を歩いて回った。市役所付近の道路は、歩くのも困難なほど、住宅、船、車などありとあらゆる物が流れていた。自分の実家に向かう道も言葉にならない程、瓦礫などが山積していて、近づくごとに恐怖心と絶望感とどうしようもない気持ちがあふれた。津波で流失してしまった実家の残骸を初めて見た時は茫然として、ただ号泣するだけだった。

震災翌日、夫がやっとの思いで自宅に無事たどり着き、津波で自宅が流失した妹夫婦が避難してきた。避難所である小学校で物資の配給を行っていたので、毎日小学校に通い、おにぎりや新聞をもらうことができた。災害情報はコミュニティFMと新聞から得た。自宅では1か月間電気がストップしたが、プロパンガスだったため簡易コンロを使用することができた。当時はとても寒かったので水を節約しながらお湯を沸かし、ペットボトルにお湯を入れて暖をとった。電気がストップしたので、冷蔵庫の食材の始末をしなければなら

ないと思い、保存していた肉は全部調理することにした。濃い目の味付けにして常温で長持ちできるように、佃煮などに調理し保存した。寒さが厳しかったのでお風呂の給湯器が破裂してしまい、お風呂に入ることができなくなってしまった。食料と水を確保しなければいけない状況だったので、宮城県地球温暖化防止活動推進員(以下、推進員)の仲間から水と米をわけてもらった。震災から2週間くらい過ぎて、関東に住む長男が食料、衣料品、日用品などを車に積んで来てくれた。職場の同僚が好意で集めてくれたものだという。自宅を流された妹たちは着の身着のまま、ほとんど何も持たないで逃げてきているので、下着、靴下、防寒着等はみんなで分け合った。とても助かった思いとありがたい思いでいっぱいだった。当時、市内の販売店は営業している所がなかったので、噂で営業していると聞いた岩手県泉根町のスーパーまで行った。2時間ほど並んで、数量限定ではあったが食料や電池など必要としていた物資を手に入れることができた。このような生活は1カ月近く続いた。

震災からの再建

震災が起きてから3カ月間は、自分の家族、親類、水産業を営む実家の事業の再建を考えるだけで頭が一杯だった。江戸時代から継承してきた実家の事業は全く先が見えず、モチベーションは上がらなかった。やむを得ず解雇した昔からの従業員のところへ赴き、話を聞いたり、説得したりし、事業が再開できる環境を整える事に奔走した。毎日不安でよく眠れず、非常に辛い時期だった。推進員や環境活動を共にしてきた仲間たちからは、再建に役立つ情報や「何としても事業を再建して欲しい」といった温かいメッセージをいただいた。事務機器や文具類などの支援物資もいただいた。常日頃、共に活動してきた「繋がり」が困難な状況に陥った時にとっても心強く感じた。事業が再建でき、回復しつつある時に初めて鰹が水揚げされた時、まずお世話になった人たちに届けた。お互いに助け合う「繋がり」を持てた事は、今までの長く環境活動に携わってきたおかげだと改めて思った。

推進員としてのエコ知恵普及

2011年5月にみやぎ生協県北ボランティアセンターが立ち上がり事務局を担当することになった。6月頃には仮設住宅への入居が始まり、同時に仮設住宅の生活環境の悪さを感じた。9月頃、仮設住宅の住民は冬にどう暮らしていくかという課題に直面した。妹が仮設住宅に入居し

ていた事もあり、「第一に防寒対策が非常に不十分」だという現実を目の当たりにした。国の支援が遅れていて10月になっても国会で仮設住宅の防寒対策が審議されていなかった。そこで宮城県地球温暖化防止活動推進センターの「みやぎ節電プロジェクト2011」へ参加した。このプロジェクトは快適なライフスタイルを損なわないように工夫しながら、省エネをしようという取り組みで、窓に貼る断熱シートや床に敷く断熱マットを使用して仮設住宅で少しでも呼びかけを行なった。また気仙沼市地球温暖化防止普及啓発事業に参加し、仮設住宅での防寒対策の学習会を行なった。仮設住宅は寒さが部屋の中に伝わりやすいので、身近な物や今ある物を上手に使うことで冬を暖かく過ごすヒントを伝えたいと考え、扇風機を使って部屋の空気を循環させ、天井と床の温度差をなくして部屋全体を暖める方法を伝えることにした。みやぎ生協県北ボランティアセンターの協力でお茶会形式での学習会も開催し、入居者の方々にリラックスしながら、参加してもらえた事はとてもよかったと思っている。

現在、県環境教育リーダーを務めているが、震災後に気仙沼市立面瀬小学校の6年生を対象に「家庭でできる節電」をテーマにした環境学習を行なう機会があった。児童の中には、親を亡くし、自宅を流された児童も多かったので、大変、気を配りながらの学習だった。震災でライフラインが寸断されたので、当たり前が当たり前でなくなった事を子どもたちも実感したと思う。毎日、無意識で行動していた事をもう一度、意識して行動することを呼びかけた。何気なく行なってきた、テレビを見る、電気をつける、冷蔵庫の開け閉めを意識して、朝起きてから寝るまでの行動を毎日チェックすることで、子どもたちのこれまで当たり前だった行動を見直してもらおう。調理室での学習では、目玉焼きを余熱調理で作り、冷蔵庫には



撮影：2011.11.8 気仙沼市切通仮設住宅 冬を暖かく過ごそう&お茶会

保冷カーテンを付けて使ってもらった。子どもたちに教えていると、反応が速いため楽しく教える事ができた。

震災後のこうした環境学習を通じて、推進員としての役割をある程度は果たせたとの思いはある。気仙沼と一緒に活動してきた人たちの中には仮設住宅で暮らしている人もいたので、その方々の役に立ちたいという思いも強かった。逆に仮設住宅での暮らしの工夫を教えていただいた事もあった。どんな状況の中でも、日々「ネットワーク」をつくってきたことが活かされるのだと感じている。常日頃から心と心が繋がっている関係を持続するためには、努力もしなくてはならないと思う。

震災を振り返って

気仙沼に住み、海と共に育ってきた。それを考えると、海と共に生きてきたし、生かされてきたことを震災で思い知らされた。気仙沼の基幹産業は

漁業なので、自然の恵みに感謝しながら享受しようという考えがある。

一概に津波が悪いとは言い切れないとも思う。海の恩恵を受ける漁業を営む人の家の天井は高く、そこには必ず神棚がある。自然と共生していく運命（さだめ）を受け入れたことの現れだ。先祖は「自然」というものは対立するものではなく、共生していくものだということを忘れないで生きてきた。正月には、神棚の近くにすめ、魚、酒を吊るし、海への畏敬の念を持ち続けてきた。自分たちの中で生活の一部のひとつが海だった。自分に取り組んできた環境活動と、先祖代々が行ってきたことは矛盾したことではないと実感している。何も無くなり変わり果てた町を見ると絶望感はあるが、今まで住んできた町への思いや地域で育まれた知恵があることで、あるがままを受けとめる事ができるのだと思う。気仙沼で生きてきたことを誇りに思い、そのDNAを感じながら復興再建を目指していきたい。

個人

シャッターを切った理由。 ただの記録ではなく、記憶を後世に。

気仙沼市

山内 宏泰 個人

取材日 2012.08.08

リアス・アーク美術館学芸員美術家として個展、グループ展など多数開催している。また舞台美術家、舞台衣装家として多数の舞台に参加している。専門は美術教育、造形理論、現代美術、地域文化教育、津波文化史研究と普及だ。東日本大震災大津波で自宅を流失した。震災後は各地で「津波の災害史、文化史」等に関する講演を行なう。著書「砂の城」近代文芸社

津波の伝承を考える

生まれも育ちも石巻。1978年の宮城県沖地震を経験していて、当時小学1年生だったが、津波注意報か津波警報が発令されたのを覚えている。高台の鉄筋アパートの4階で暮らしていた。幼かったので津波というのが何なのか理解することができなかったが、それでも子ども心に「避難する準備だけはしないとイケない」と感じ、自分の宝物をリュックサックに詰めて、服を着たまま、懐中電灯の灯りをじっと見つめて一晩を過ごした事を覚えている。この地震で初めて津波を意識させられた。

海の近くに住んでいれば「海洋文化」があるわけで、当然、津波被害の歴史がある地域では、それは海洋文化の中に組み込まれなくてはいけない。昭和8年の昭和三陸大津波、昭和35年のチリ地震津波から、東日本大震災が起きるまでにいった

い何をしてきたのか。日本人は大事な何かを忘れてしまったように思う。戦後、日本が大きく変わって津波という意識が人々の心の中から消えてしまったためではないだろうか。

3年で「津波文化」を継承していく仕組みをつくらなければ、また忘れられることになる。例えば、三陸沿岸部の小学校や中学校では、総合学習の中で必ず津波の学習をする時間を設け、地域で年に1度は集まって津波の勉強会を開催する。避難訓練を年中のお祭り行事として津波の脅威を継承していくのもいいだろう。けれども地域の生活文化が崩壊している現代社会では、どう残していこうかと考えた時、難しい部分が多い。

3月11日 14時46分

美術館1階の取蔵庫で作業中に大きな揺れが起きた。自分にとっては、未曾有、想定外という思